

科目名	環境と文化 (平成 29 年度以降履修用)	単位数	2	授業 形態	講義	担当 教員	祖田 亮次 (文)
英語表記	Environment and Culture						

平成 28 年度以前にこの科目を単位履修した学生は履修できない。

● 科目の主題

本講義では、人間－環境関係について、様々な視点から考える。その際、自然科学的な作業から自然現象を明らかにするのではなく、人文学的な視点から、何を問題と捉え、どのように考えればよいのかということを中心に講義を進める。

● 授業の到達目標

「自然」や「環境」の意味は、社会状況や時代によって大きく異なるものであることを理解し、我々が「認識」している自然環境と、どのような関係を切り結んでいけばよいのか、多角的・多面的にとらえるための知識と考察方法を身につける。

● 授業内容・授業計画

水田や里山は自然なのか？ 近所を流れる河川はなぜこのような形になっているのか？ 国立公園や世界自然遺産はどのような意味を持つのか？ 熱帯雨林の消滅に日本はどう関わっているのか？ エコツーリズムの背景にはどのような政治的意図があるのか？ 自然災害をどう認識し、克服すべきなのか？

現代は、様々な環境問題が国際政治の場において語られる一方で、人々は「身近な自然」に対しても意識的になりつつある。この講義では、これらの自然や環境に関わる具体的な現象や問題をとり上げながら、私たちがどのように自然や環境と関わっていくべきかを考察する。

考察対象とする具体的事例としては、近畿圏の身近なものから、アジア・ヨーロッパなど世界各地のものを取り上げる。

- ① イントロダクション
- ②～③ 環境決定論・環境可能論、風土論、政治生態学
- ④～⑦ 河川改修、自然再生、災害文化、流域

社会論

- ⑧～⑩ 熱帯雨林、プランテーション、バイオマス社会論
- ⑪～⑫ 焼畑・狩猟採集・水田・里山、半自然・半栽培
- ⑬～⑮ 国立公園・世界遺産、エコツーリズム

● 事前・事後学習の内容

2 回に 1 回の割合で宿題を出しますので、それなりの負担になります。授業で学んだ内容をもとに自分で調べものをして理解を深めるためのもの（復習的なもの）や、翌週授業の予習と位置付けられるものなどが、課題として出されます。また、実際に現地を訪ねて情報を収集するフィールドワーク的な宿題が出る場合もあります。いずれも、A4 で 1 枚程度（600～1,000 字程度）の分量です。授業時間中に宿題の内容を発表しますので、欠席すると宿題を提出することが難しくなります。宿題は翌週の授業時間中の提出が必須です。欠席や宿題忘れなどの場合でも、遅れての事後提出は認めません。

● 評価方法

評価のおよその内訳は以下のとおりです。出席：5%、授業時のコメント・ペーパー：20%、宿題・小レポート：40%、最終レポート 35%

評価は「秀 (AA) (2013 年以降入学者のみ)」「優 (A)」「良 (B)」「可 (C)」「不可 (F)」の 4～5 段階で、「欠」はありません。過去のおよその成績比率は以下の通り。

AA：5%、A：20%、B：35%、C：20%、F：20%

● 受講生へのコメント

本講義は地理学の議論をベースにしますが、高校時代に「地理」を履修していたかどうかは一切問いません。高校までに「地理」を履修した人は、地理＝地名や特産品の暗記というイメージを持っているかもしれませんが、本来の地理学は、人

間—環境関係を考察することを主眼としています。したがって、少しでも環境認識や環境問題、災害文化等に関心があれば、誰でも受講可能です。

● **教材**

特定のテキストは使用しません。参考図書などがある場合は、講義の際に提示します。